
死に村

いふじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死に村

【Nコード】

N3653H

【作者名】

いふじ

【あらすじ】

民族学者の真鍋和典は民俗学研究のために全国を旅していた。そんなあるとき、和典の旅に付き合っていた彼の妻、楓が体調を崩してしまう。和典は妻を心配して彼女の故郷である村に帰ろうと提案する。自然が豊かな場所なら妻の体調にもいいと考えていた。しかし、妻は故郷に帰ることを告げると・・・。

第一話（前書き）

夏ですじ。

第一話

夢か、現^{うつ}か、幻か。

男にはわからない。

だが、夢とは到底思えぬ確かな現実感。

「そうか、そうだったのか・・・」

男の声は絶望に包まれていた。

昭和五十年、初夏。まなへかずのり真鍋和典は照りつけるような太陽の日差しを鬱陶しく感じていた。

和典は一昨年大学を卒業したばかりの青年ではあるが、その道ではそれなりに名の知れた民族学者である。

和典は民話の研究のために日本全国を歩き回っていた。

そんな折、和典の妻が体調を崩してしまった。

和典の妻は元々体が丈夫ではなく、知り合った頃からしばしば体調を崩していたが、今回は特に辛そうだった。

「大丈夫か楓、辛くはないか？」

和典は布団で寝ている妻の名を呼び優しく言う。

「ええ、平気です。それより私のために和典さんの研究を中断させてしまいましたね」

「そんなこと気にすることじゃないよ。僕の研究より君のことだ。むしろ謝らなければいけないのは僕だよ。君にはいつも苦勞をかけているからね」

「苦勞だなんて思ったこと、一度もありませんよ」

「・・・ありがとう」

「いえ、でもこれからどうなさるおつもりですか？　このまま、この町の宿に滞在されるのですか？」

楓の言葉に和典は首を横に振る。

「実は一度、君の実家に帰ろうと思っているんだ。あそこは自然がいっぱいあって空気も綺麗だからね。安静に療養するならあそこは最適だよ」

「私の実家ですか・・・」

楓は和典の話を聞いた直後に、その美しい顔を不安の色で染めていった。

「どうかしたかい？」

「い、いえ・・・」

「そうか？ 顔色が少し悪くないかい？」

「大丈夫です」

そう言うつと楓は和典を安心させるように笑顔を見せる。

「そうだね、大丈夫そうだ。それで、急なんだけど出発は明日でもいいかな？」

「本当に行くのですが？」

「楓？」

「すみません。でも・・・」

「謝ることはないよ。君が嫌なら行かないさ。目的は君の療養なんだからね。君が嫌なのに行っても意味はないさ」

「嫌ではないんです。ただ・・・」

「ただ？」

「いえ、なんでもありません。それじゃあ、明日の準備をしなくては いけませんね」

布団から起き上がろうとする楓を和典は強引に布団へと戻らせた。

「和典さん？」

「君は今日一日、ゆっくりと休んでいてくれ。準備なら僕がするか

ら」

「でも……」

「病人は世話をされる義務があるんだよ？」

和典は楓にそう言うと、静かに部屋から出て行った。

「ありがとうございます」

楓は誰もいない部屋で囁くような声で言い、そして眠りについた。

その日、楓は夢を見た。

和典と出会った時のこと、出会ってから今までのこと。

楓には和典という時間が輝いていた。

本当に楽しかった。

だからこそ和典を故郷には連れて行きたくなかった。

来年ならば楓は喜んで和典を自分の実家に招待しただろう。

再来年でも、そのまた次の年でも楓は喜んだことだろう。

だが、今年だけは、なるべくなら実家に帰りたくはなかった。

理由は楓自身にもわからない。

ただ、本能がそう告げているのだ。

「和典さん……」

楓は急に不安になり、夫の名前を呼んだ。

第一話（後書き）

続きものです。

よろしければどうぞ。

第二話（前書き）

拙い文章で申し訳ありません。

第二話

妻である楓の故郷に向かうため、和典は旅行の準備をしていた。

「あの、和典さん。やはり私もお手伝いします」

「楓、君はゆっくり休んでいて。明日にはここを発つんだから」

「・・・はい」

翌朝、二人は旅館を後にする。

旅館から徒歩五分の位置にある駅で電車を待っていると、楓が和典の手をぎゅっと握る。

「楓？」

「すいません。あの・・・」

「うん、どうかした？」

「いえ・・・あ、もう電車が来ましたね」

「ああ、本当だ」

和典は楓の行動を不思議に思ったが、電車が到着したことで楓が自

分に何を言いたかったのかを聞けなかった。

「君の実家に行くのは本当に久しぶりだね。君と結婚する時以来だから、もう二年は経っているのかな？」

「そうですね」

二人は電車の心地よい揺れを感じながら、話に花を咲かせていた。

話が弾んだためか、目的の駅に着いたのはすぐのように感じられたが、腕時計で時間を確かめみると、既に二時間が経過していた。

楓の故郷へはここから山へと真っ直ぐに進み、地元の間でも知らないだろう獣道を何本も通り抜け、そこから林道を一時間程歩かなければならない。

和典は楓の身体を気にして声をかけようとしたが、楓はただ笑顔で頷いてそれ以上和典に何も言わせなかった。

途中で何度か休憩を取り、予定よりも少し遅れて二人は楓の故郷である村にたどり着いた。

そこは山奥にある小さな村である。

村には数える程しか人がおらず、お世辞にも活気があるとはいえなかった。どちらかといえば廃村といった方が納得できるような村である。

だが、その分自然は綺麗である。

空気も澄んでいておいしい。

「懐かしいです」

あまり乗り気ではなかった楓も、やはり久しぶりの帰省は嬉しそうであった。

「どうですか？」

少女のような笑みを浮かべて楓は和典の顔を見つめる。

「微かにしか覚えていなかったけれど、やっぱり空気がおいしいよ。だけど・・・」

和典はそこで言葉を詰まらせた。

「気のせいかな、霧がやけに多く感じる。この村はいつもこんなにすごい霧なのかな？」

和典は不思議そうな顔で楓に尋ねる。

「いえ、いつもはこんな霧なんて・・・」

「楓？」

突然、楓の気配が消えた。

それも和典の目の前で。

それと同時に村を包む霧はどんどん濃くなってくる。

「楓！ どこだ！？」

和典は必死になって楓を探し始めた。

しかし、楓からは何の返事も返ってこない。

「楓・・・」

『・・・・・・・・』

「え？」

突然、背後に人の気配が現れた。

和典は楓かと思い後ろを振り向こうとした。

だが、そんな和典の頭に急激な痛みが奔った。

それは何か硬いもので殴られたような衝撃だった。

次第に和典の意識は薄れていく。

『ウフフ・・・』

和典が意識を失う直前、どこからともなく女の奇妙な笑い声が聞こえてきた。

第二話（後書き）

もし、よろしければ今後ともよろしくお願いします。

第三話（前書き）

読んでいただけて幸いです。

第三話

最愛の娘が殺された。

もう何も・・・。

何も？

何がだ？

今、自分は何を考えていた？

わからない。

男には一体何が起きたのか、まったく理解できなかった。

人が死んでいる。

それも一人や二人ではなかった。

村に流れている川は血の色で真っ赤に染まり、川には大量の屍が浮かんでいる。

その中には女や子供の屍も混ざっていた。

村の惨状を目の当たりにした男は恐怖と不安に駆られ、妻の下へと急いで向かった。

「そんな・・・」

妻の下へと向かう途中で男は知り合いの母子の無惨にも変わり果てた姿を目にした。

その母子は本当に仲が良かった。

どういう事情で父親がいないのかはわからないが、父親がいないくても、その母子は本当に幸せな毎日を送っていた。

だが、今はもうその母子が以前のように幸せそうな笑顔を見せることはない。

母は我が子に覆いかぶさり、何かから守るように絶命している。

その母子を見て、いや、その母親の下にいる子供を見て男は奇妙な違和感を覚えた。

何かが違う。

おかしい。

「あ・・・」

そこで男は子供を見てあることに気づいた。

子供とはいえ小さい。

小さすぎる。

それは異常だった。

男は恐る恐るその子供の屍に近づいていく。

そして、男は先ほどから感じていた違和感の正体に気づいて大きく息を呑んだ。

子供の体の胴から下が無い。

男は思わずその場で嘔吐した。

「楓・・・」

そう言うと、男は服の袖で口元を拭い妻の下へと走り出した。

「楓！」

家に着くと男は勢いよく扉を開けて妻の名を叫んだ。

しかし、家の中に妻の姿はどこにも見当たらなかった。

男の頭に不安が過る。

「楓！ 返事をしてくれ！ 楓！！」

男は妻の名を叫びながら必死に家の中を捜す。

家の中は灯りが消えていて闇に包まれていたが、男はそれでも必死に妻を捜し続けた。

だが、どこを捜しても妻はいない。

「一体何が起きたんだ・・・」

そう呟きながら辺りを見回していると、男の肩に水のような何かが落下してきた。

「うわっ!？」

男は驚きの余りその場に腰を抜かして倒れてしまった。

「な、何だ？」

自分の肩に落ちてきた水のような何かに触れて、男は首を傾げる。

「水・・・にしては何だかぬるぬるしているな」

ポタッ。

ポタポタポタッ。

天井から水のような何かが次々と男の衣服や床に落下してくる。

そして、その水のような何かは、次第に男の衣服を赤く、紅く浸食していく。

「赤い、まさか・・・」

男は自分の予測が外れていることを祈った。

ゆっくりと上を見上げる。

そこには・・・

男の予測していたよりも遥かに酷い光景があった。

「・・・そんな」

見上げた先には全身をズタズタに切り刻まれた妻が天井に縛り付けられていた。

いや、違う。

正確には妻らしき女が縛り付けられているのだ。

女の顔は体と同じく、ズタズタにされていたので本当に天井に縛られている女が妻なのか判別の付けようがなかった。

「ああ・・・嘘だよな？　嘘だって言ってくれよ！」

男の嘆きは虚しく響く。

すでに村人たちと同じ屍と化した妻であつたらう女は何も答えられない。

ただ何も言わず、潰された両目で男を見下ろしているだけであつた。

男の心は絶望という思いで支配されていた。

それから何時間経っただろうか。

本当は一分と経っていないかもしれない。

男にはわからない。

男は虚ろな瞳で無惨に切り刻まれた妻だったものの姿を見上げていた。

『アハハ・・・』

「誰だ！」

どこからともなく女の奇妙な笑い声が聞こえてきた。

『フフフ・・・』

「誰なんだ？」

『だから・・・言っただけでしょう？』

先ほどの女の声が再び聞こえてきた。

だが、今度は笑い声ではなく、男に語りかけてきた。

子供に言い聞かせるように穏やかな口調ではあったが、男はその声にかつて味わったことのない恐怖を覚えた。

「何なんだ？ お前は一体どこにいる？ お前は・・・誰だ？」

『私は・・・』

女の声がそう言いかけた瞬間、男の脳裏にある光景が浮かび上がった。

「今は・・・」

第三話（後書き）

もうしばらく続きます。

第四話（前書き）

ご注意を。

第四話

男の脳裏に浮かんだ光景について、男はしばらく一人で色々と考えてみたが、やはり答えなぞ出なかった。

「行ってみるか」

そう言うと、男は一人孤独に神社へと向かい出した。

この村にある神社は村で一番大きな屋敷であり、そこに住んでいる宮司が村の長のような役割も果たしていた。

神社は村の一番奥に位置する場所にあるため、男はかなりの距離を歩くことになった。

そこは静かな場所であった。

村の奥には死体が一つもなく、のどかなものである。

この村で大勢の人間が死んだことが夢であるように思うほどである。

そう、思っていた男だったが、一歩、また一歩と神社に近づくにつれて、男の身体に恐怖が少しずつ込み上げてきた。

やがて男は、目的の場所へとたどり着いた。

『来たのね・・・』

再び女の声がどこからともなく男に語りかけてきた。

「お前はどこから僕を見ている？」

だが、女は何も答えを返さない。

「楓……。僕は、どうすればいいんだ？」

ギイ……。

木のこすり合わせたような音がしたかと思うと、神社の戸がひとりでに開いていく。

「入れ……。と？」

男は怪しいと思いつつも、何かに誘われるように中へと入って行った。

中に入ってすぐに、男は目を覆いたくなるような悲惨な光景を目にした。

酷いことに神社の戸付近の壁や床には大量の血がぶちまけられていた。

そして、廊下の端には恐怖で顔を歪ませている男の生首が三つ並べられていた。

そのうちの一つは、妻の楓と同じく顔面をズタズタに切り刻まれていた。

「これは・・・」

今までも十分に異常であつたが、この神社の中は、今まで見てきたものとは比べ物にならないくらい惨いものだった。

だが、おかしいことに、廊下に並べられている男たちの生首以外に人の屍は一つもない。

血の量に対して、どうして死体がどこにも見当たらないのかと男は考えたが、考えても無駄だということを途中で悟り、男は考えることをやめた。

男は恐怖で何も考えられなかった。

だが、どうしてか、男は恐ろしくてたまらないはずなのに、何故だかこの神社から出て行こうとはしなかった。

「フッフ・・・」

神社の広間から女の奇妙な笑い声が聞こえてきた。

男はまるで、その笑い声に誘導されるように広間へと向かった。

「真っ暗だな」

広間は灯りが消えていて何も見えなかった。

部屋中を闇が深く包み込んでいる。

手探りで部屋を調べるしかない、そう思っていたときだった。

部屋に小さな灯りが燈った。

その灯りを燈したのは一人の女だった。

女は赤い着物を着ている。

小さな皿に小さな炎を燈した蝋燭を立てて、それを持って見るものを恐怖に駆り立てるような笑みを浮かべて男を見つめた。

男は灯りが燈った先に地獄を見た。

赤い着物の女の周りには大勢の屍が積み重ねられていた。

ある者は手足を引きちぎられており、またある者は鍬や鎌を持って絶命している。

男は再び嘔吐した。

もう出す物が何もないと思っていたが、それでも、胃液が喉を流れて口から出る。

そんな男の下に、赤い着物の女はゆっくりと向かってくる。

「お前は・・・」

男に近づいていくにつれて、次第に赤い着物の女の笑い声は大きくなっていく。

その笑い声は聞いていて恐ろしく、それでいてどこか悲しいものを男に感じさせた。

赤い着物の女は不気味な高笑いを上げて少しずつ男に歩み寄る。

だんだんと近づいてくる。

その一步一步が男に恐怖を与える。

男は恐怖で気が狂ってしまいそうだった。

気がつくと、赤い着物の女は男のすぐ近くまで迫っていた。

あと二歩。

あと・・・一歩。

赤い着物の女は男の目の前で何故かピタリと止まった。

それと同時に女の不気味な高笑いも消える。

女はじつと男を見つめている。

怖い。

男の頭は怖いという二文字の言葉で埋め尽くされていた。

恐怖で目の前に立っている女を直視できず、男は目を瞑ってしまう。

「私を見て・・・」

女の声は男に衝撃を与えた。

その声は、男が毎日聞いていた、男が心から愛していた女性の声であつた。

「・・・そんな」

男はそう言いながら、徐々に閉ざした目を開けたいく。

赤い着物の下に隠れている女の白い素肌が妙に艶めかしかった。

「フフフ・・・」

女はそう笑いながら、男の頬を優しく撫でる。

「楓・・・」

第四話（後書き）

ありがとうございます。

第五話（前書き）

前回からかなり日にちが経ってしまいました。

よろしく願います。

第五話

男は自分の目が信じられなかった。

男の目の前に立っている赤衣着物の女は、他の村人たちのように屍と化したと思っていた妻の楓であった。

「ふふふ・・・」

「か、楓なんだよな？」

「う・・・ああ・・・助けて・・・」

「楓！」

楓は急に苦しみだし、その場に倒れこんでしまった。

「楓！　しつかりしろ！」

男は倒れた妻を抱きかかえながら叫ぶ。

「あなた・・・」

楓は夫に、必死になって何かを言おうとしている。

「どうしたんだ？」

「お願い・・・」

「お願い？」

「今すぐ・・・私を・・・」

「楓？」

「私を・・・殺してください・・・」

「な、何を言うんだ！ そんなこと・・・」

「お願いします・・・私を・・・」

「そんなことが出来るわけ・・・」

そう言い掛けて、男は悪寒を感じた。

「アハハハハハハハハハハハ！」

楓は、恐ろしい高笑いをしたかと思うと、男の右肩を女とは思えないほどの力で激しく掴みかかった。

「うあっ」

男はたまらずうめき声を上げる。

その声を聞いた楓は、一瞬力を抜き、男に逃げろと言うが、最後に楓は嬉しそうにその表情を恍惚の色に染めながら、先ほどよりもさらに大きく不気味な高笑いをしながら男にゆっくりと手をかざしていった。

怖い。

怖い、怖い。

怖い、怖い、怖い。

怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、

怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、

怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、

怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い……

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
○

男はそれしか考えられなかった。

「あ・・・ああ・・・」

男は走った。

ここから脱出しよう、この村から脱出しよう。

しかし、楓はとてつもない速さで追い付いて、男のすぐ背後でゆつくりと男に恐怖を植えつけるように、じわじわと手を伸ばしていった。

出口はすぐそこに見えていた。

もう少しだ。

もう少しで・・・。

「ふふふ・・・」

背後から、楓の艶めかしくも恐ろしい笑い声が聞こえてきた。

駄目だ・・・もう。

「だから・・・言っただけでしょう?」

楓の優しげな声と共に、男の肩に手が届いた。

第五話（後書き）

もう少々続きます。

第六話

「うっ・・・」

夏だというのに、身を引き裂くような冷たい風が和典の頬を打った。

「ここは・・・」

和典は虚ろな瞳で周囲を見渡した。

和典の周りには、相変わらず濃い霧が視界を支配している。

「一体何が・・・」

『あれかえ?』

どこからか老婆のような声が聞こえてきた。

『おお！ あれじゃ!』

『あれかえ?』

『あれじゃ！ あれじゃ!』

『ほう・・・まだ若いのにのう』

男の耳には次々と気味の悪い声が聞こえてきた。

老婆のような声を皮切りに、年老いた男の声、嬉しそうな女の声、

同情するような男の声。

どれも和典を恐怖に陥れるには充分過ぎるほど、気味の悪い声であった。

「誰だ？」

『ほっほっほっほっ』

「そっだ・・・楓！どこにいるんだ！」

『ひっひっひっひっ』

「うるさい！」

『これはこれは・・・』

『怖いっのっ』

『本当じゃ』

『威勢が良いのっ』

『まったくじゃ』

『ほっほっほっほっほっほっほっほっほっ』

「一体この声は何なんだ！？僕は一体どうしたっていうんだ？これは幻聴なのか？」

『ひっひっひっひっひっひっひっひっひっ』

『はっはっはっはっはっはっはっはっはっ』

「うるさい！ 笑うな！ やめろ！ やめろ！」

和典は両手で頭を抱えて首を大きく横に振りながら言う。

『黙りやつ』

突然、老婆のような声が辺りに響き渡った。

声は何度も何度も木霊を繰り返していく。

そして、その声が合図だったかのように、和典の視界を支配していた濃い霧が徐々に薄れていった。

霧が晴れていくと同時に、和典は不思議な光景を目の当たりにすることとなった。

「どうということだ？」

霧が晴れ、和典の視界に映ったものは、楓の故郷である村だった。

しかし、何かが違う。

何が違うのかと聞かれても、和典は答えることが出来ないのだろうが、直感的にここが楓の故郷ではないと感じた。

だが、村の中にある家屋の配置、樹木の位置、どれもこれも楓の故

郷である村と瓜二つであった。

「本当に何がどうなってるんだ？」

和典には何一つ理解できなかった。

「ん？」

和典は自分の右手が何かを強く掴んでいる感触を覚えた。

「何だ？」

視線を自分の右手へと向けていく。

「うわっ！」

視線の先には、血がべっとりと付着している短刀のようなものが、和典自身が気づかぬうちに、手の中で強く握っていた。

気がつけば、和典の右手は強く握り過ぎていたためか、指先から血を流血させていた。

「どうしてこんなものを僕は・・・」

『アハハ・・・』

和典の耳に、聞き覚えのある奇妙な笑い声が聞こえてきた。

『アハハ・・・』

確かにどこかで聞いた覚えがあるのだが、どこで聞いたのかを思い出せない。

『苦しい．．．』

『殺して．．．』

『助けて．．．』

『来るな！』

『お前も一緒に．．．』

『どうして？』

『この子だけは助けて！』

『お母さん！ お母さん！』

『怖いよ．．．』

『お願い．．．』

『そんな．．．』

『やめてくれ．．．』

『まだ．．．』

様々な阿鼻叫喚が和典の耳に聞こえてくる。

「今のは何だ？」

周囲を見渡しても誰もいなかった。

しかし、和典の耳には恐怖に怯える声が聞こえてくる。

『何故？』

『助けて！　お願いよ！　何でもするから助けて！　いや・・・やめて！』

『何をする！』

『死にたくない・・・』

『やめてええ！　殺さないでえ・・・』

和典の耳に届いてくる声は、和典が村を一步步くたびに聞こえてくる。

「僕は一体どうしたんだ？　それに、この声はどこから聞こえてくるんだ？　村の人たちはどこに消えたんだ？」

和典は村全体を歩き回り、自分以外の誰かがいないか探し回った。

だが、楓を含めた村人全員の姿は、村のどこにも見当たらなかった。

「本当に、何がどうなっているんだ？」

『どうして・・・和典さん』

「楓！」

和典の耳に、楓の悲しげな声が聞こえてきた。

「楓！」

和典は必死に妻の名前を呼ぶ。

「楓！ どこだ？ どこにいるんだ？」

『和典さん・・・私は・・・』

「頼む！ 姿を見せてくれ！ そして一緒にここから逃げよう！」

『駄目・・・もう遅すぎるわ・・・』

「どういうことだ？ 遅すぎるって何が・・・」

『だって・・・もう・・・』

その言葉を最後に、楓の声は一切聞こえてこなくなった。

「こんな所で何をしているの？」

突然、背後から少女の声がした。

振り向くと、そこには年にして八・九才ほどだと思われる少女が和典を睨むように見つめていた。

「君は・・・」

「命」

「え？」

「私の名前」

「君の名前？」

和典がそう尋ねると、命と名乗った少女は無言で頷いた。

命は桜の模様が描かれた黒い着物を着ていて、その腕には赤い着物を着た、髪の長い日本人形を抱いている。

和典は、命と、命が抱いている人形の雰囲気になにか恐ろしいものを感じずにはいられなかった。

「命ちゃん、君は・・・この村に住んでるの？」

「違う」

「それじゃあ近くの村に住んでるのかな？」

「違う」

「そう……」

「……………」

この異常な事態に、こんな小さな子供が一人だというのは危険だ。

そう思い、命と一緒にここから逃げることを提案しようとしたときだった。

「私はあなたの知りたがっている答えを知っている」

命の言葉に和典は一瞬動じたが、すぐに冷静を取り戻す。

「何を言っているんだい？」

「何を？ ふふふ、面白い人ね」

「命ちゃん、君は一体……」

「知りたくないの？」

「え？」

「この村で一体何が起きたのか」

「君は知っているのか！」

「ええ」

そう言うと、命は和典に背を向けて歩き出す。

「何をしているの？」

立ち尽くしたまま、命の背を見ている和典に命は言っ。

「着いて来なさい」

「どこに行くつもりなんだ？」

「ふふ・・・」

命は気味の悪い笑みを浮かべて和典を見た。

「この村で何が起きたのか、私が思い出させてあげる」

そして、再び急な頭痛が和典を襲った。

第七話

男は気がつけばどこともわからぬ森の中で一人ポツリと立ち尽くしていた。

「ここまで来れば・・・」

「どうなさいました？」

「ひっ！」

男は声の方には振り向かず、叫び声を上げて逃げだした。

「どうなさいました？ 大丈夫ですか？」

女の声が男を心配したように言う。

男には女の声が何故か妻の声に聞こえて仕方がなかった。

「来るな！」

「そんなことを言っている場合じゃありません！ その先は・・・」

「僕に構うな！ 頼む！ 来ないでくれ！」

「戻りなさい！ その先は崖です！」

「え？」

男は女の声で間一髪、危機を逃れることが出来た。

「大丈夫ですか？」

女は男に駆け寄り言う。

「ああ・・・」

「ここは危険です。とりあえず近くに小屋があるので、そこに避難しましょう」

男は女の提案で近くにある小屋へと避難することにした。

女の話では、この小屋は十年以上も誰にも使われておらず、廃れてしまったのだという。

「どうしてあんな所に一人でいたのですか？　ここは人が迷って入れるような所ではありません。ここは・・・」

「なら何故君はここにいたんだい？」

「私ですか？」

「ああ」

「私はこの近くにある村の者だからです」

「こんな所に村があるのか？」

「ええ。小さいですけど本当に平和な村ですよ」

「そうか・・・平和な村か・・・」

「ええ、よろしければ、あなたもいらつしゃいますか？　こんな場所では身体を休めることも出来ないでしょうし。それに・・・」

「それに？」

「あなたを放っておけば、あなたは死のうとするんじゃないやありませんか？」

「どうしてそう思うんだい？」

「顔を見ればわかります」

「そうか」

「ですから、村にいらしてください。何のおもてなしもできないですが、身体を休めるくらいなら出来ますから」

「・・・」

「どうしました？」

「君の村は平和な村なんだろう？」

「ええ。とても平和ですよ。村の人たちも良い人ばかりですし」

「そうか。それじゃあ、なおさら僕みたいな人間が行っていいような場所じゃないな」

「え？」

「君はどうして僕があんな場所に一人でいたと思う？」

「それは・・・」

女は男の顔を見ると、すぐに顔を伏せ俯いた。

「君の考えている通りだよ。僕は死ぬためにこの森に入ったんだ。だけど、いざとなったら死ぬのがどうしようもなく怖くなってるね。逃げ出したんだ。でも、迷ってしまって気がつけば君と出会った場所になっていたよ」

「どうして死のうとしていたのですか？」

「僕は人殺しなんだよ。人を・・・殺してしまったんだ」

男はそう言って、自分の両手を見つめた。

女は男が嘘を吐いているとも思えず、黙って男の話を聞くことにした。

「僕は妻を・・・心から愛していた妻を殺してしまったんだ」

「何故ですか？」

「何故？ わからないんだ。どうして僕は妻を殺したのか」

「それでは、どうやってあなたは奥様を殺されたのですか？」

「どうやって？ わからない。いや、わかっていることなんて何一つないんだ。」

何故僕は妻を殺したのか。どうやって妻を殺したのか。どうして僕は妻を殺さなければいけなかったのか。いや、違う……。僕は一つだけわかっていたんだ」

「何をわかっていたのですか？」

「目の前にいる女は妻じゃない。僕の妻の楓じゃない。それだけはわかっていたんだ」

「楓？ あなたの奥様のお名前ですか？」

「ああ、僕は……」

「どうやって奥様を殺したのかもわからないのに、どうしてあなたは奥様を殺してしまったと思うのですか？ もしかして、誰かがあなたの奥様を殺してしまったかもしれないではありませんか」

「僕が気がついたときには、楓の死体が僕の目の前に横たわっていた。そして僕は右手に短刀のような何かを握っていた。それに……。僕のこの手の中に残っているんだ。妻を、楓を殺した時の感触が……」

「あなたのお名前は？」

「どうせすぐに死ぬ人間の名前なんて覚えることはないよ」

「いいえ。あなたの奥様の為にも、あなたを死なせません」

女は真剣な面持ちで男を見て言った。

「真鍋和典」

男は女の真剣さに、気がつくと言乗っていた。

「私は棗楓」

「楓？」

「ええ。あなたの奥様と同じ名前ですね」

「すごい偶然だな」

「本当に偶然でしょうか？」

「え？」

「私は偶然とは思えません」

和典の妻と同じ名前の女。

棗楓はそう言うと、小屋から出て行った。

「どこへ行くんだ？」

「私の村です」

「君の？」

「ええ。あなたをここに残しておくことなんてできませんから。さあ、一緒に行きましょう、和典さん」

楓はその美しい顔に、笑みを浮かべさせる。

和典は思わず胸の鼓動が速くなるのを感じていた。

第八話

「どうしたの？」

桜の模様の入った黒い着物を着た少女は、腕に抱いている人形を抱く力を少し強めて和典を見て言った。

「今のは何だ？」

「・・・・・・・・・・」

「今のは僕だ・・・でも、僕にはあんな記憶なんてない」

「ふふ・・・・・・・・」

「どうしたんだい？」

「いいえ。何でもないわ。それよりも到着よ」

少女に案内されてたどり着いたのは、大きな赤い鳥居だった。

そして、突然少女は和典の手を取り、自分の右胸を触らせた。

「な・・・・・・・・」

「覚えている？ あなたはここで私の胸を激しく貫いたことを」

少女は年齢からは考えられない艶めかしい仕草で言う。

「な、何を言っているんだ？」

「思い出せないの？ あなたはここで私の胸を何度も何度も激しく貫いたじゃない」

「ぼ、僕はそんなことしていない！」

「本当に？」

「当然だ！」

「でも、あなたの身体は覚えているはずよ？」

「さつきから君は何を言っているんだ？」

「まだ思い出せないの？」

「思い出すも何も、僕はそんなこと・・・」

「どうしてこの村には誰もいないのかしら？」

少女は楽しそうに笑いながら和典に尋ねてくる。

当然ながら和典には、村に人がいない理由などわからない。

「わからないの？」

和典は少女に何も答えることが出来なかった。

黙って少女を見つめることしかできない。

しかし、少女は和典の沈黙を無視して再び笑う。

今度の笑いは先ほどのものとは違い、不気味さを感じさせられるものだった。

「あなたがこの村の人を皆殺しにしたんじゃない！ 皆・・・死んじやった」

「僕は・・・」

「そんなことしてない？」

少女は和典を挑発するような口調で言う。

どこか少女の様子がおかしい。

「人間って便利ね。都合の良いことだけ覚えていて、悪いことは何も知らない振りが出来るんだもん」

「僕は本当にそんなことしていない!」

「でも私はここであなたに殺された。誰よりも最初に・・・ね」

そう言った少女は、その愛らしい顔を火照らし、自らの両手で身体を抱いた。

「気持ちよかった・・・」

『もっと強く！ お願い！ もっと強く私を貫いて！ もっと激し

く！ もつと！ もつと・・・もつと、も・・・』

和典の脳裏に、目の前にいる少女が何者かに短刀のような鋭いもので胸を何度も何度も突き刺されている光景が浮かび上がる。

そして、少女は動かなくなった。

「何だ・・・」

「あは、やつと思い出してくれた」

「本当に僕は・・・君を・・・」

「ふふ。私だけじゃないわ」

「どういう・・・」

「さつきからあなたが聞いている声は何？」

「え？」

『ああ・・・』

『きゃああ！』

『痛いよ・・・』

『死ぬ、死ぬ、死ぬ、死・・・ぬ・・・』

「この村の人たちの叫び声。もつと聴いているはずよね？」

「違う・・・こんなの・・・」

「何が違うの？」

そう言うと、少女は着物をはだけさせて胸の部分を和典に見せる。

「見てえ」

「やめろ！」

「ねえ見てえ・・・」

哀願するような表情で少女は言い続ける。

「ほら、ここよ。この傷跡。いっぱいあるでしょ？ 全部あなたがやったのよ？」

少女の胸には幾つもの深い傷跡が痛々しくあつた。

「それは・・・」

「ねえ、もう一度して。お願い。あの時のように気持ちよくさせて・・・」

少女ははだけた着物を一枚残らず脱ぎ捨て、和典の身体に抱きついてきた。

「お願い。今度は前よりも激しく。激しく！ 激しく！ 激しく！」

「う、うわ！」

和典は恐怖に耐えかね、少女を突き放す。

「う．．．」

すると、少女の動きが突然止まった。

「ど、どうした？」

「あは．．．気持ち．．．」

少女は和典に突き飛ばされ、刃のように尖った木の枝に腕を貫かれていた。

「ねえ、もっと！ もっと激しくして！ こんなのは嫌！ あなたの手で私を貫いて！」

「来るな．．．」

どうしてこんなことになったのだろうか。

「来るな．．．」

どうして、記憶にない記憶が自分にあるのか？

「来るな．．．」

どうして．．．。

「来るな！」

和典は駆け出した。

必死に逃げた。

息が出来なかったが、それでも走った。

自分がどこに向かって走っているのかもわからなかったが、それでも和典は走り続けた。

第九話

「はあ、はあ、はあ・・・」

『どこ・・・』

『いや・・・』

『もう・・・』

どこへ行っても和典の耳には苦痛や恐怖、悲しみに満ちた声が聞こえてくる。

「やめろ！ やめろ！ 僕は何もしていない！ 僕は・・・」

和典は走った。

しかし、走っても走っても声は聞こえ続けてくる。

「はあ、はあ、どうしてこんな声が！」

そんな和典の目に廃れた小屋が姿を見せた。

「あ！ あそこ！」

和典は何の迷いもなく、朽ち果てた小屋へと足を踏み入れた。

「何なんだ！ 何なんだよ！」

床にどかっとなり込み、叫び声を上げる。

『和典さん』

「楓？」

和典は聞こえてきた妻の声に辺りを見回す。

「ここは・・・」

自分が逃げ込んだ小屋に、和典は何故だか見覚えがあった。

そして、再び和典を原因不明の頭痛が襲った。

第十話

和典は期待に満ちた表情で我が家への道のりを急いだ。

途中で何度も石に躓きこけて、そのたびに擦り傷を作ったが、そんなものともせず、和典は走った。

目指す場所は村の一番奥にある寺だ。

目的の場所にたどり着くと、和典は足を休めず、寺の中央に位置する大広間まで一息に向かう。

「よし」

和典は大広間の襖を開ける。

「楓！」

「静かにせい」

年齢にして六十の村唯一の助産婦である、棗山子が声を低くして言う。

「あつ、すいません。あの、それで・・・」

和典は山子のように声を低くして尋ねた。

「安心しなさい。無事、産まれたよ」

「本当ですか！」

「静かにせい」

「すいません」

「元気な女の子じゃよ。可愛い子じゃ。ほれ、今は楓が抱いておるよ」

産まれたばかりの赤ん坊は、楓に抱かれて気持ちよさそうに眠っていた。

「和典さん。見てください。私と和典さんの子ですよ」

「ああ。良く産んでくれた。ありがとう、楓」

「はい」

「そうだ、お義母さん。楓の身体は大丈夫なんですか？」

「ああ。どこも悪いところはないさ。ただ、産後なんでしばらくは安静にしていることだね」

「はい。お母様」

「しかし、ほんに可愛い子じゃ。わしにとっても初めての孫じゃから」

「あの、和典さん」

「なんだい？」

「私、この子の名前を考えてあるのですが、私が付けてもいいでしょうか？」

「もちろんだよ！ それで、この子の名前は何というんだい？」

「命」

「命か・・・」

「はい。命を大事にしてくれるようにと、そう願って・・・」

「命を大事に・・・」

和典は、その言葉に楓と出会った時のことを思い出した。

「ああ、そうだね。うん。命か。良い名前だな」

笑って言った。

第十一話

命が産まれてからは月日があっという間に過ぎていった。

命は既に七つになっており、母親譲りの美しさが子供であるにも関わらず、あらゆる面で輝いていた。

和典は、父親としてそんな娘が可愛くて仕方がなかった。

そして、それからさらに一年が過ぎたある日、寺の中から楓の大きな叫び声が聞こえてきた。

和典は何事かと、声の聞こえた方へと向かう。

声はどうやら大広間から聞こえてきたようだった。

「静かにせい。他の者にでも聞かれたらどうするつもりじゃ」

「ですがお母様……」

「これは、もう決まったことじゃ」

「どうして……どうしてのですか？ 命はまだ八つなのですよ？」

「命？」

娘の名前が話の中に出てきたことで、和典は思わず声を出してしまった。

「誰じゃ！」

山子の鋭い声が和典を刺す。

「すみません。あの、楓の声が聞こえたのでどうしたのかと」

和典は襖越しに山子に弁解する。

「ふむ、和典か」

「和典さん……」

中からは、山子の値踏みするような声と、楓の不安を纏った声が聞こえてくる。

「ふむ、よろしい。入りなさい」

「はい、失礼します」

山子の了解を得て、和典はゆっくりと襖を開けて入った。

「この際じゃ、和典にも伝えておこう」

山子はそう言うと、和典の目を見て話し始めた。

「この村はの、呪われておるのじゃ」

「はっ？」

和典は山子の発した言葉の意味が理解できなかった。

「の、呪われている?」

「そうじゃ」

「誰にでしょうか?」

「人ではない」

「そうれじゃあ、霊的な何かですか?」

「それはわからん」

「何故、呪われているのですか?」

「それもわからん」

「何もわかっていないのにどうして・・・」

と、言った和典を手で制して、楓は首を横に振る。

「楓?」

「今、お母様が仰ったお話は本当のことです。この村は呪われています。この村の呪いを外に出さないために、村には結界が張られていました」

「結界? 誰がどうしてそんなものを?」

「わかりません。私が生まれた頃には、もうすでに結界は存在しており、また呪いも同じく存在しておりました」

「わしらの時代もそうじゃ。いつからあるのかわからんよ。じゃが、実際にこの村は呪われておる」

「先ほどから呪われていると仰っていますけど、具体的に何か起こったのですか？」

「ああ。この村の人間は皆、一度死んでいるのじゃよ」

そう言った山子に和典は疑いの表情を向けて、次に楓を見た。

しかし、楓は黙って頷くだけであつた。

第十二話

「二十年以上前じゃ。その頃は楓もまだ、ほんの子供じゃったよ。そうじゃの、たしか今の命ほどじゃったかの？」

「ええ」

楓は懐かしむように、遠くを見ていた。

「それにまだ、あの子も生きとったしの」

と、山子が言った直後、先ほどまで昔を懐かしんでいた楓の表情が急に崩れ、両手で顔を覆い隠して号泣した。

「楓!？」

「すまんの、楓。あの子のことを思い出させてしまったの」

「あの子？ お義母さん、あの子とは一体誰なのですか？」

「命・・・命・・・」

「えっ？」

楓は泣きながら、娘の名前を叫び出した。

「命がどうかしたのか!」

「和典よ、落ち着きなさい」

「しかし、命の身に何かがあつたのでは・・・」

「安心せい。お前らの娘は無事じゃよ。今も静かにお前らの部屋で寝ておるじゃろうが」

「そ、そうでした。しかし、それでは楓は何故・・・」

「楓の言う命とはの、わしのもう一人の娘のことじゃ」

「娘？ お義母さんのですか？」

「ああ。楓の双子の妹でな。二人はほんに仲が良かった」

「その、もしかして命さんは・・・」

「そうじゃ。既に命は死んでおる。わしらと一緒に。じゃが、わしらは生き返った。何故生き返ったのかは聞くな。わしにはわからん。だが、わしらの中でただ一人生き返らなかった者がおった」

「それが命さんなのですか？」

山子は首をゆつくりと縦に振った。

それからしばらくの間、沈黙が山子と和典の間に訪れた。

大広間には、楓の泣き声だけが響いていた。

第十三話

「和典さん、和典さん！」

女の声が和典を呼んでいる。

和典は自分と呼んでいる女に身体を揺さぶられていた。

「うっ！」

頭の頭痛はまだ少し残っていた。

「和典さん！」

女が悲壮な声を上げて、和典を抱きしめる。

「う・・・誰・・・だ？」

「楓です」

「楓・・・？」

「はい。和典さん、大丈夫ですか？」

「楓！」

「良かった。和典さんが無事で・・・」

そう言うと、楓は和典を一層強く抱きしめた。

「今までどこにいたんだい？」

「わかりません。でも逃げてきたんです」

「逃げてきた？　一体何から？」

「声から・・・です」

「声？」

「はい。この村に入った時から、私が村を一步步くたびに恐ろしい声が聞こえてきて・・・」

「まさか・・・」

「本当です。それに、何度も頭痛がしたかと思うと、私は夢のようなものを見ていました」

和典は妻の告白を黙って聞いていた。

「夢なのか、私自身の記憶なのか・・・いえ、私の記憶ではないはずです。でも・・・」

そこで楓は一呼吸置いて、そして泣きながら和典に縋りついた。

「私は・・・人を殺していました。この村の人たちを・・・。そして和典さんをこの手で殺していたんです」

楓は和典の胸に顔を沈めて泣いた。

「僕もなんだよ」

「え？」

「僕にも声が聞こえてくるんだ。多分、楓が聞いた声と同じような声がね。それに、記憶にない記憶が、頭痛が起こるたびに何度も浮かんでくるんだ」

「和典さんもなのですか？」

「ああ」

楓は夫の告白を信じられない、といった表情で聞いていた。

「どうしてこんなことが・・・」

「わからない」

「村の人もいないですし、母もやはりいませんでした」

「僕も村中探し回ったけど、村には誰一人いなかったよ」

「私たち、これからどうなってしまふのでしょうか？　もしかして・・・」

ギィィィ・・・。。。

突然、小屋の戸が開いた。

戸の前に、何者かが立っている。

「ふふふ、見つけた」

そこには命と名乗った少女が潤んだ瞳で和典を見つめていた。

「もうどこにも逃がさない」

「命ちゃん。君は・・・」

「ふふ。命って呼んで。あら、あなたもいたんだ」

楓を見て、命はさらに嬉しそうに笑った。

「あなたは・・・」

「あなたも私のことを思い出せないの？」

「いいえ、私はあなたを知っているわ」

「本当？」

「命・・・よね？」

「あは！ 覚えてくれてたんだ！ 楓姉さん！」

「でも、あなたは・・・」

「ええ、死んだわ。その男に殺されて」

「え？」

楓は命の指さす方向へと顔を向ける。

命が指さした先には和典がいた。

「嘘・・・」

「嘘じゃないわ。その人も覚えているわよ。いいえ、思い出したと言った方がいいのかしら？」

「和典さん・・・」

「違う！ 僕は何もしていない！」

「ふふ。確かにあなたじゃないわね」

「何？」

「でも、やっぱりあなただわ」

「何を言っているんだ？」

「私を殺したのは今のあなたではなくて、前のあなた」

二人は命の言っている意味がわからなかった。

「前世だとも言うのか？」

「前世？ いいえ、違うわ」

「それじゃあ何だっていうんだ！」

「ふふ。それは自分で考えて」

そう言つて、命は後ろを向いて小屋を離れて歩き出した。

「待つて命！」

楓の声が命を呼びとめた。

「何？」

命は振り返り、楓を見つめる。

「村の人は・・・この村の人たちはどうしたの？」

「ああ、村の連中ね」

と言うと、命は不気味な笑みを楓に見せて言った。

「殺したわ。一人残らずね。皆、殺してやった」

「そ、そんな・・・。どうして！」

「いいじゃない。どうせ二度も死んでいるんだから」

「二度？」

楓は怪訝な表情で聞き返した。

「覚えてない？ 一度目はその男に殺された。私も楓姉さんもね。そして、二度目には姉さんに殺された」

「私が？」

「やっぱり覚えていないのね」

「やっぱりってどういうこと？」

「ふふ。ここはそういう場所だから」

「そういう場所？」

そう言ったのは和典である。

「そうよ。でもこれ以上は教えてあげない。後は自分たちで思い出して」

そう言い残して、命は姿を消した。

小屋には和典と楓の二人だけが、互いを抱きあうように地面に座り込んでいた。

第十四話

「起きて・・・」

女の声が和典の耳元で聞こえてきた。

「楓？」

周囲はまだ闇に包まれている。

「どうしたんだ？」

「ごめんなさい。でも、今日しかないの」

「何をいつているんだい？」

「お願いします。この子を、命を連れてこの村から逃げてください」

「何？」

「このままだと、命は村の生贄にされ、殺されてしまいます。ですから、その前にこの子連れて逃げてください」

楓の真剣な表情を見て、和典は何も言えなかった。

「楓はどうするんだ？」

一瞬の沈黙。

楓は口を開いて言った。

「私はここに残ります」

「何を言っただ！ 君も一緒に・・・」

和典の口元に、楓は自分の人差し指をつけて言葉を遮らせた。

「静かに。お願いします。私にはやるべきことがあります」

「やるべきこと？」

「はい」

「それは何なんだ？」

「和典さんは知らなくても良いことです」

「知らなくて良いだって！ そんなこと・・・」

「お願いします・・・」

泣き崩れながら懇願する妻を、和典はそれ以上問い詰めることが出来なかった。

「楓・・・」

「私の、一生で一度のわがまを聞いてくださいますか？」

そう言った楓の眼は、何かを決意したものであった。

「わかった」

「ありがとうございます」

「それで、今すぐに発った方がいいのかい？」

「はい」

そう言いながら、楓は自分の娘の髪を愛おしそつに撫でた。

「可愛い私の子。元気に育ってね」

「う……ん……」

命は母に撫でられて、気持ちよさそつに寝がえりを打った。

「和典さん。お願いします。それと、何があってもこの村には戻ってこないでください」

「ああ」

と言うと、和典は身支度もろくにせず、命を背に乗せて寺を出て行った。

「楓」

老婆の声が暗闇から聞こえてきた。

「お母様」

「母親とは辛いものじゃな」

「いいえ。あの子が幸せに暮らせるのなら、私は他に何も要りません。命のことは和典さんに任せましたので、私も安心出来ます」

「そうか・・・」

月の光が部屋を照らし、山子の姿が現れた。

「では、今一度聞く。お前は娘の代わりに自らを生贄とするのじゃな？」

「はい」

「そうか。では・・・行くぞ」

楓は頷いて静かに立ち上がった。

そして、着ている寝巻を脱ぎ、純白の装束を身に纏った。

第十五話

楓は村の中央にそびえ立つ大樹に縄で縛りつけられていた。

その周囲には和典と命を除いた村の人間全てが、狐の仮面を被り、その片手には松明が握られていた。

「すまんの、楓。これも村のためなのじゃ・・・」

「はい。わかっています。でも、これで命と和典さんを生贄にさせずに済むのですね？」

「いや、それは違う」

「え？」

「わしはやはりこの村の掟には逆らえぬ。もう死にとうないのじゃ」

この村の掟。

それは、余所者の血をこの土地に吸わせることである。

五十年周期で、この村は今回のような儀式を繰り返していた。

和典のように、この村に迷い込んできた余所者を、この村の人間は何人も殺してきた。

余所者がいない年は、人里に下り、適当な人間を攫い儀式の生贄としてきた。

そして、今回の儀式の生贄は、余所者である和典と、その血を引き継いだ子供である命であった。

「お母様・・・」

「生贄はあの二人じゃ」

「何を言っているのですか？　だって、生贄には私になっているではないですか！？」

「お前では儀式は成功しない。お前は生贄ではない」

「それじゃあ、これは・・・」

「わしからの・・・せめてもの情けじゃ。親子が離れ離れになるのは辛かるう」

「そんな！」

「直にあの二人もここに来るじやろう。今、村の若い者が数人で追いかけておる」

「そんな・・・」

「すまんの、楓・・・」

「お母様！　裏切ったのですね！　私を裏切ったのですね！」

楓は縄に縛られながらも必死に叫び、村人全員をその目に焼き付け

て呪いの言葉を放つ。

「呪ってやる！ お前たち全員一人残らず呪い殺してやる！
いつでも！ いつまでもこの土地の人間を呪いころしてやる！
死ね！ 死ね！ 死ね！ 死ねええ！！」

「ひい・・・」

山子は自分の娘に恐怖した。

「や、やれ！ 矢を放て！ 火を灯せ！」

その直後、弓を手にした三人の男たちから、矢が放たれ、楓の頭を貫いた。

眼球を貫いた。

脳を、腕を、喉を、脚を、何本もの矢が貫いていった。

そして、楓は動かなくなった。

だがさらに山子は、楓の身体を松明の火で焼き始める。

「すまん。すまん。すまん」

山子は涙を流して、動かなくなった楓に謝り続ける。

母親は子供を覆い隠すように庇うが、そんな母親の喉を、落ちていた矢で一突きで刺し殺した。

「お母さん！ お母さん！」

「大丈夫よ。すぐにお母さんと同じ所に逝かせてあげる」

と言うと、楓は子供の首を絞め、そしてその身体を引き千切った。

それは文字通り引き千切ったのだった。

それから、楓は村人も殺した。

殺して、殺して、殺して、殺さして、殺して、殺して、殺して、殺しまくった。

逃げる男の胸に矢尻を埋め込み殺した。

許しを乞う女をねじ切った。

自分と同じ背丈の女の顔をズタズタに引き裂き殺した。

自分に矢を放った男三人の首を千切り取った。

そして……。

山子を石で何度も何度も殴りつけた。

血しぶきが噴水のように湧き起こった。

だが、楓はそれでも殴りつけた。

血が出なくなるまで殴りつけた。

楓の着ている純白の装束は、いつの間にか自らの血と殺した人間の
返り血で赤く、紅く染まっていた。

第十六話

和典の脳裏に断片的な記憶が浮かぶ。

村の人間を殺している。

一番最初に殺したのは若い少女だった。

美しい少女だった。

和典はその美しい少女を何度も短刀のようなもので貫いた。

そのたびに、少女は舌を出して快感に打ち震えていた。

「もっと強く！　お願い！　もっと強く私を貫いて！　もっと激しく！　もっと！　もっと・・・もっと・・・も・・・」

少女は息絶えるまでそう叫び続けた。

和典には、その少女が何より愛しく思えた。

「はあ、はあ、はあ」

和典の中で何かが言う。

「もっと殺せ！　もっと殺せ！　こいつだけじゃ足りない！　もっとだ！　俺を満足させるにはもっと、もっと殺すんだ！」

和典は村へと向かった。

「はあ、はあ、はあ」

次に殺したのは双子の姉妹だった。

彼女らもまた、貫かれるたびに快感を感じていた。

男も殺した。

子供も、老人も、生きている人間は全員殺した。

「はあ、はあ、はあ」

殺す人間がいなくなった。

村の人間は全て殺した。

殴って、蹴って、刺して、燃やして、千切って、抉って、殺す手段が浮かばなくなるほどの殺し方を試した。

「はあ、はあ、はあ」

殺したい。

「はあ、はあ、はあ」

殺し足りない。

「はあ、はあ、はあ」

もっと殺したい。

「もう殺せる人間はいないのか・・・」

「いや、まだいるじゃないか」

「ああ、そうか」

「まだいる・・・」

そうして、和典は自ら喉に刃を突き刺した。

そこで、和典の記憶は途絶えた。

最終話（前書き）

冬ですが・・・。

最終話

「何だ・・・今は一体」

頭が割れそうだ。

殺したい。

「えっ？」

誰ともわからない声が聞こえてくる。

「あ・・・」

殺したいな。

殺したいな。

「ああ、そうか・・・」

殺し足りない。

「そうだったのか・・・」

その声は絶望に包まれたものだった。

「思い出した。これが・・・」

「呪いか・・・」

そうして和典は殺された。

「ああ・・・気持ちいい!」

和典の目の前には、楓が血で真っ赤に染まった斧を、快楽に満ちた表情で握りしめている。

「はあ、はあ、はあ」

殺したい。

「はあ、はあ、はあ」

殺し足りない。

「はあ、はあ、はあ」

もっと殺したい。

「もう殺す人間はいないのかしら・・・」

「いや、まだいるじゃない」

「ああ、そうよ」

「まだいる・・・」

楓は斧を捨てて、鋭く尖った木の枝を拾う。

そして、それで自らの左目を貫いた。

痛い。

でも、心が打ち震える。

もっと、もっと、もっと。

この痛みを感じていたい。

「ねえ、どうしてこんなに気持ちいいのかしら？」

痛い。

痛い。

痛い。

気持ちいい。

「ねえ、どうしてかしら？」

もっと感じたい。

「ねえ、命・・・」

何も感じなくなった。

「嫌！ もっと！ もっと！」

楓は何度も何度も同じ個所を貫いた。

そのうち、楓は死んでしまった。

「ここは、そういう場所だから」

命の嬉しそうな、悲しそうな、どちらともつかない声が小屋に響き渡った。

最終話（後書き）

完結です。

どうでしたでしょうか？

読了後、後味が悪い、気持ち悪い、なんだコレ？

といった症状に見舞われたのであれば、失礼ながら私はとても満足です。

もともと、そういった気持ちになっていただこうと思って書いた作品でした。

不快に感じた方がいらしたら申し訳ございません。

次回のホラー作品を書くとしたら、もう少し違った気分を味わえるような作品に仕上げたいと思います。

それでは、今までお付き合い頂きありがとうございました。

お疲れ様です。

感想などがございましたら、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3653h/>

死に村

2010年10月10日20時56分発行